

“ミニマムインターベーションの是非を問う”

When immediate, when early, when late?

-インプラント埋入時期の是非について考える-

山中歯科医院 山中拓人

インプラント治療におけるミニマムインターベーションについて考えると、フラップレスによるインプラント埋入、ショートインプラントの埋入、抜歯即時埋入といったことが挙げられるかと思いますが、今回は主にタイトルのトピックスに絞ってお話させていただきたいと思っています。

私が NYU に留学していた 2007 年、NYU の Eliau 氏による論文から、抜歯窩の唇側骨と軟組織の有無によって如何に治療計画をたてるか、抜歯後の唇側骨が残存しているか否かによって抜歯即時埋入の選択は如何に行うかということが、当時の NYU 講義においてよく議論されるトピックスでした。そして、2008 年の Buser 氏による論文にて、インプラントの埋入時期に対する分類がなされたことにより、抜歯窩の状態に応じてインプラントの埋入時期に対するアプローチが明らかに変わってきて、当時の NYU クリニックにおいても、抜歯窩の状態によって待時埋入を行うケースも増えてきました。症例に応じた的確な診断を行い、アプローチを変えながら対応することは、日常の臨床においてとても重要なことであると考えます。

そこで、今回、私が NYU にて学んできたアプローチの仕方、それから約 10 年が経過し、抜歯後のインプラント埋入時期に関する長期経過の論文から得られたエビデンスを基に、抜歯後の即時埋入(Immediate)、待時埋入(Early)、遅延埋入 (Late) の利点・欠点について比較検討したいと思います。そして、さらにミニマムインターベーションという観点から、インプラント埋入時期の是非についても検討したいと思います。